令和２年度　図工・美術科研究のまとめ

下伊那教育会　図工・美術科委員会

Ⅰ　研究テーマ

「感性を働かせながら，自分らしい表現や鑑賞の力を育む授業」
～「思い」がつながる　広がる　わたしの造形ネットワーク ～

Ⅱ　研究テーマの視点

図画工作・美術科では，感性を働かせながら自分らしい見方や表し方を育み，つくりだす喜び，鑑賞する楽しさを感じる児童生徒の姿を目指している。そのためには，自分の表したいことを見つけ（表現主題＝「思い」），自他の表し方や感じ方の良さを学び合い，自分の表現に満足感を得たり，お互いの感じ方の違いに気づいたりしながら表現や鑑賞を行う過程を大切にしていく必要がある。即ち表現や鑑賞活動の中で自分の学びの高まりが自覚できれば，つくりだす喜び，鑑賞する楽しさも感じられるようになると考える。

本年度はコロナ禍により公開授業も制限される状況の中，研究テーマについては昨年度の方向を継承し，全郡研究テーマ「学び続ける個の育成」の中から「授業づくり」「自他との関係」を窓口にして研究を進めてきた。

昨年度の研究では，課題に対して漠然とした「思い」は持ちやすいが，それを表現していく方法について，迷いや不安を持つ児童生徒が少なからずいることが分かった。また，グループで「思い」について話すとき，友の「思い」についての感想やアドバイスが「思い」からそれた内容になってしまい，話す方も聞く方も共に話し合う必要感が生まれにくい状況になりがちであることもわかった。

そこで本年度は子どもたちの「思い」に更に寄り添い，そこから広がる学びの過程を明らかにするべく実践を深めてきた。

Ⅲ　研究の内容

１　学び続ける個の姿とは

題材との出会いから「思い」を持ち，必要な素材や用具を選択し，「思い」をどう表現したらよいか，自己の中で対話しながら制作する姿。また，友だちの作品鑑賞や，友だちとの「思い」の交流を通して新たな気付きを持ち，自分の制作に生かすことができる姿。それらの繰り返しによって，自己の中で「思い」を深化させ，表現をさらに追求する姿。そのような造形活動を通して，思いの達成（自己肯定感）を感じた児童生徒は，次の学びへの意欲や関心を持つことができると考える。このような過程の連続を設定することで，学び続ける個の姿が表れると捉える。

２　取り組んだ研究の視点

【研究の視点①】－授業づくり－
・「思い」（表現主題）を表現に結び付ける手立ての在り方
【研究の視点②】－自他との関係－
・「思い」（表現主題）を広げる「対話の時間」の設定と環境づくり

Ⅳ　研究で明らかになったこと

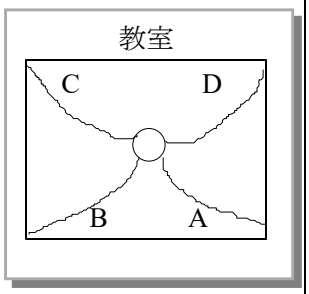
1　松川北小学校 授業公開から

学　級　：　松川北小学校３年　　題材名　：　「ひもひもワールド」
授業者　：　稲吉　匠　教諭

（1）事例１（本年度研究の視点①にかかわって）
「テープをぴんと張りたい」という思いを持ち，試行錯誤しながらその思いを実現していったＲ児

【導　入】
　板書内容を確認した後，教師は「好きなように自由につないでいってください。では，どうぞ。」と話した。R児はすぐに材料コーナーへ向かい，黒い毛糸玉を手に取って「よし。ここでいいだろう。」と天井から吊されたすずらんテープに結びつけていった。(Aの場所)

【展　開】
　「よし，できた。」とつぶやくと，先ほどの結びつけたすずらんテープのもう片方の先を（B）の位置へ行き，結びつけた。そして「よし。これでいいだろう。一応できた。一応できた。」とつぶやき，通りかかった教師に「先生，超楽しい。」と伝えた。そこからは自分が結びつけたテープのたるみが気になり，もっとぴんと張らせたいという思いから，何度も結び目の上にひもを巻き付けたり，ひっぱってみたりすることを繰り返していた。
　そこから，一時テープをぴんと張ることをあきらめ（D）から（C）へテープを結び，自分のテープを教室全体へ広げていく。そんな中（C）で結び目を操作すると（D）の結び目が動くことに気づく。そこからは（D）と（C）を行き来し，何度も結び目を動かしながらテープがぴんと張るように調整した。時に友だちに「誰か，押さえてて。」と助けを求めながら，時にイスの上に乗り，高い場所まで結び目を動かしながら，ついにはテープをぴんと張ることに成功した。



【終　末】
　R児は「先生！上がった！」と叫び「やっと高くできた。」と友だちに話した。友だちから「どうやったの？」と訪ねられ「これはなぁ…。」と得意気に説明する姿があった。

【考　察】子どもが思いを持ち，その思いを広げていける環境作り

・本時では，教室の天井中央から４本のテープが張られていた。そして長机には色とりどりの毛糸やすずらんテープが用意されていた。また，子どもたちが高い場所で操作できるようにするための椅子も用意されていた。この環境作りが，子どもたちに「こうしたい」「やってみたい」という思いを抱かせることに繋がっていったと考える。
・天井から教室の四隅に伸びるテープの設置は，多くの児童が自分の活動場所を見つけて造形活動を行うために有効であり，且つ友だちの様子を間近で見たり，友だちと相談したりするために適切であった。また色とりどりの毛糸やテープは，それぞれが異なる「ひも」の特性を持ちながらも，強度や伸縮性・操作性の高さにおいて，３年生の発達段階に適していた。Ｒ児は毛糸を中心に造形操作を繰り返したが，すずらんテープと毛糸の組み合わせによって結び目を動かせることに気づき，自分の発想を広げることができた。また，１本つなぐごとに異なる色のひもを選択しており，多様な色の素材が用意されていたことも，子どもたちがより活動を楽しむ姿につながったと考える。そして，子どもたちが高い場所を操作するための椅子を用意しておいたことで，高いところでの活動を補助するとともに，自然と高いところにも目が向き，平面的な見方に加えて立体的な見方の面白さにも気づかせることができたと考える。

　以上のことから，本時に向けて準備されていた「環境作り」が，意欲的に表現活動に取り組み，自己の思いを実現していくＲ児の姿を生み出したと捉えることができる。

（2）事例２（本年度研究の視点②に関わって）

友達から認められ，対話が生まれたことで，素材から得た「思い」をさらに追求しようとしたH児

【ビニール紐を使っての活動】

①授業が始まるとすぐに一人で活発に活動を始める。冒頭からやりたい「思い」を持つことができている。

②天井からつるされているビニール紐に，青いビニール紐をつるす活動を続ける。

③全種類のビニールを一気に引き出し，全部を縛ってまとめたあと，つるす。

④4回ほどその活動を繰り返す。

⑤担任から「他の人の活動も見てごらん」と声を掛けられる。近くにいたＲ児が「Hちゃんすげー。Hちゃんのしか目に入らん。」とつぶやくが，H児はそれにも反応せず，ひたすら自分の追求を行う。

⑥Y児が「Hちゃん，次は何するの。俺用意してあげる。」と一方的に同じ活動に参加する。H児は教えながらも，自分の手は全く休めない。何人かの子どもたちがH児のつるしている周辺に自分のひもをつるし始める。Y児はH児のつるしたカーテン状になったカラフルなビニール紐の束を下から覗く。

【毛糸を使っての活動】

⑦4本目をつるした後，今度は毛糸を手に取る。毛糸もビニールと同じように全色を引き出し，まとめて切る。

⑧つるすことはせず，ひたすら巻いたりねじったりして試行錯誤する。

⑨しばらくたった後，毛糸をまとめてカラフルなボンボンを作る。

【考　察】

H児は基本的に無口で，自分のやりたい思いに向かって一直線に制作を進めていく様子だった。とても発想豊かで，おそらくたった一人で活動したとしても同じように追求できる力があると思われる。H児の取り組みは，教室の様子を一気に変化させ，周囲の子どもたちにも大きな影響を与えた。⑥の場面で友だちから話しかけられてもほとんど応答せず，自分のやりたいことのみを黙々と続けていたため，このまま自己内対話だけで授業が終わるかと思われたが，毛糸を使った活動を行い始めたところで意識の変化が見て取れた。⑦では毛糸を張ったりつるしたりするのではなく，全色をビニール紐と同じようにまとめて引き出し，切っていた。おそらく⑤や⑥の場面において，友達から自分の活動を認められたことで，自己の取り組みに自信を深め，他の素材であっても同じ手法で活動を進めようとしたのではないか。設定された対話ではないが，自然に会話ができる学級の関係，授業の場づくりが「思い」をさらに広げ，深めていく取り組みに繋がったと考えられる。

2　松川中央小学校 授業公開から

学　級　：　松川中央小学校６年　　題材名　：　「時空の扉をひらいて」
授業者　：　北田 聡一朗　教諭

（1）事例３（本年度研究の視点①にかかわって）
学習カードや参考作品等の手立てが思いを持ち，表現するために有効だったN児

【前時までのふり返りとめあての確認】
・前時までに学習した表現方法を参考に，自分の思いにそった表現をどうしたらよいか困っていることを発表させて本時のめあてを確認した。

【めあて】
描きたい場面を友だちに説明したり質問に答えたりして，表現方法･構成･配置をはっきりさせて描こう

【友達との関わり】
Ｔ：友達とのやり取りについて説明する。
Ｎ児：「先生が見本で見せてくれたドアみたいに開く感じを考えている。」と，友に伝える。
友達：「いつ？」「これは何？」とＮ児に聞き，自分の言葉で描きたいものを伝える。
Ｔ：「友だちと話したことで，描きたいことが変わってもいいよ。では始めましょう。」

【制作】

Ｎ児の思い（表現したいこと）
「来年の夏休み　沖縄に行って　家を買って　外でサイダーを飲みたい」

Ｎ児：一番描きたいところ：**「外の風を感じて，海を見ながらサイダーを飲んでいるところ」**
→（気持ちよさ・爽快感を表現したい？）
Ｎ児：最初に白い画用紙を用意し，はさみを取りに行く。ドアを作ろうとしている。
→前時に見本で見せてくれた「ドアを開く」参考作品が強く印象に残っている様子。
Ｎ児：画用紙でドアができると手が止まり，しばらく考えて洗面台の絵を描きだした。そこへ教師が来て「思い」の確認をした。
Ｔ：「思いが大事だよね。じゃ，どうやって出す？色？表情？」
Ｎ児：「表情は無理かな。」
Ｔ：「じゃあどこで出すか，それを考えて。」
→Ｎ児は洗面台の続きを描いた。

【考　察】
～Ｎ児が自分の思いを持ちながら制作へつなげるための手立てになっていたこと～
① 学習カード「いつ　どこへ行って　どんなことをしたい」
→言葉で書いてイメージを持つ
② ネットによる資料（海の写真）集め　→自己のイメージを広げる
③ 参考作品を見る　→自己のイメージを具現化するための方法を知る
④ 友達に自分の表現したいことを伝えたり答えたりする　→言語化し，イメージを固める

Ｍ児の資料：海の写真

教師に「『思い』をどう出す（表現する）？」と聞かれたとき，言葉で即答はできなかったが，Ｎ児は沖縄の海や風を感じる爽快感を表現したかったと思われる。そのために海を見ながら風を感じられるように，画用紙を切ってドアを開くという作業を一番最初に行った。Ｎ児の姿から「思い」を表現しようとする様子が伝わってきた。①～④の丁寧な手立てがあったからこそ，本児は「思い」を表現につなげることができたと考えられる。

（2）事例４（本年度研究の視点②にかかわって）

「思い」を広げる「対話の時間」の設定と環境づくりにより，表したいものをはっきりとさせ，表現手段を決め出していったK児 ～単元を通したとらえ～

・題材「時空の扉ひらいて」の第２時，教師が描いたテーマが同じ７作品の相互鑑賞を行い，それぞれの造形要素や思いを探していった。

①第１時，「縄文時代に，海や山の近くで，自給自足の生活をする」というテーマを決め，開いたドアの向こうに木の陰から獲物を狙う姿を描こうと考えた。

②第２時，二つ折りのダンボールの内側に描かれた絵の相互鑑賞を４人グループで行い，以下のことを見つけ出す。

【何で】画用紙・ダンボールを切って貼り付けている。
【どんな風に】月や宇宙を大きく見せるために，人やウサギを小さくしている。
外側が扉になっていて開けたり閉じたりできる。開いたその瞬間を表している。

・相互鑑賞後「縄文時代の夜で狩をしたい」というテーマに絞り，一番描きたい場面を「ドアを開けたときの目の前の瞬間」とし「ドアをもっと珍しい感じにして，中の様子は（夜の感じを出すために）鉛筆だけで描く」ことを考えた。感想記入の際には「先生たちの絵を見て，今自分が描こうと思っていた絵の描き方が少し変わった。」と記入した。

③第３時，制作開始前に行った制作前のテーマについてペアで質疑応答を行った際，友に「狩をしている人が自分？」と聞かれ「ちがう。ドアを開いている手が自分。」と応えていた。

④第５時，「実際にやってみると，ダンボールを切ったり，画用紙を切ったりするのが大変だった。でも予定通りに切れているので，この後も確認しながらやっていきたい。」と学習カードに記入した。

⑤第６時，「とびらの部分が90%ぐらいできた。なので今度はとびらを丁寧にし上げ，縄文時代の様子を鉛筆のみで描く。」と学習カードに記入した。

【考　察】

・「思い」は，子どもによってぼんやりしていたり，ストーリーのように時間の幅があったり，要素がたくさんありすぎて何らかの形にまとまっていなかったりと様々である。K児も思いが漠然としていた子の一人であったが，本単元の制作を進めつつ，その内容について毎時友だちと話し合う中で，自己の頭の中が整理され，自分の思いに合致した表現方法が徐々に見えてきた感があった。
・単元を通して，友と制作に関するアイディアや技法等に関する話し合いを重ねることで，子ども達個々が描く「思い」は徐々に具体的な姿を成し始め，画面上に現れるということがK児の姿から伝わった。やはり子どもたちの「思い」を具現化するためには，話し合う（伝え合う・相談し合う）活動を随所に位置づけることが大切であると感じた。

3　松川中学校 授業公開から

学　級　：　松川中央学校３年　　題材名　：　「私のかたち・いろ　広がれ！」
授業者　：　水野　恭子　教諭

（1）事例５（本年度研究の視点①にかかわって）

教師の示範や試しから，表現方法を試行錯誤しながら思いを表現することに向かっていったＫ生

【Ｋ生の表したい思い】
今の自分：勉強難しすぎて嫌。人間関係絶望的。
なりたい未来の自分：悲しさを無くすくらい明るくしたい。

【表現方法が広がる教師の示範】
・導入時，教師による示範をＫ生はじっと見つめていた。
・実際にジェッソをたっぷりと使って色を作り，ローラーを使う混色の仕方を説明。
・ローラーを使った色の効果を説明。
・「色々あるので自分の気持ちに合わせて」と教師が言い，活動に入った。
・Ｋ生は活動に迷うことなく，試し用の木の着彩に入った。

【自分の表現に自信をもって取り組める試し】
・制作が始まると同時に，試し用の木に彫った溝に色をつけていく。
・勉強や人間関係が嫌な自分の部分をグレーにしようか白にしようか悩んでいる様子。
・ローラーを使ってグレーを塗り込んでいく。
・「先生灰色うすい？」と机間指導にまわってきた教師に尋ねる。
・「どうしたいの？」と聞かれ，「もうちょっと濃くする」と答える。（頭の中ではイメージができている様子）
・グレーを濃くしてみると，事前に着色した部分が隠れてしまい，見えなくなる。
・「見えない…！白にする！」と声をあげて，本番の制作に入る。
（開始から２０分）
・ジェッソをたっぷりと使い，白で着色する。
・「白でも見えない？」と教師に尋ねる。
・教師に「見えてるよ」と言われたが，「そうかな～」と本人は言った。
学習カードを見ると「青が目立つように白を塗った」と記入していた。
・学習カードに記入する次回に向けての欄に「オレンジと白の境が変になったから，白じゃない色で試す」と書いていた。

【考　察】
①教師の示範によって，Ｋ生は迷うことなく制作に入った。見通しがもて，さらには子どもたちの「早くやってみたい」という気持ちを引き出すような示範だった。
②試し用の木があったことによって灰色の明度を複数回試すことができ，青い線を潰さぬように配慮しつつ，自己の暗い面を効果的に表現するための色合いを探すことができた。より自分の思いに近づくよう，試行錯誤ができる支援は非常に効果的であったと感じる。また一度試すことができるので「本番で失敗してしまったらどうしよう」という不安を抱くことなく，本番に挑めたように思う。

（2）事例6（本年度研究の視点②にかかわって）

制作の進め方を意識し，友と声を掛け合いながら「思い」の表現を追求するＴ生とM生

【Ｔ生の表したい思い】
今の自分：すごく疲れていてモヤモヤしている。
なりたい未来の自分：明るい気持ちで仕事や勉強を受けいられるようになりたい。
【M生の表したい思い】
今の自分：流されている。
なりたい未来の自分：流されないように耐えられる自分。
【二人のかかわり】
〇着色した板に二人とも白インクをローラーで塗る。
Ｔ生：真っ白になったことで「こうなることを想定していなかった。」
M生：「想定しろよ・・・。」「（俺は）逆につかないな。」
〇マスキングを貼る。
・Ｔ生がマスキングをするのを見て，M生もマスキングを始める。
【二人の生徒の制作過程で共通すること】

↑ジェッソで部分的に白く着色するM生

↑マスキングテープを貼り，カットするＴ生

↑それを見てM生もマスキング実施

↑別の色を上から重ねるＴ生とM生

彫った部分の色は，上から
赤－オレンジ－黄（濃-薄）－緑－青

【Ｔ生の作品】

【考　察】
・お互いに制作の進め方を意識している様子が伺える。（時折お互いの作品を見たり，声を掛け合ったりする姿があった。）
・Ｔ生が制作したその少し後，M生が同じように制作を進めていくように見てとれた。
→M生は自分が制作を進めていくうえで，同じように進めているＴ生の姿を見たり，話したりすることにより，常に進め方を確認しながら制作することができた。
・自己の「思い」を表現するため，上昇しながら徐々に明るい色へと変化していくような画面を構成したＴ生。M生とは具体的なアドバイスを交わし合う訳では無いが，互いの取り組みを常に見ながら，時に笑い合いながら，互いの制作を認める姿（同様の取り組みで制作を進める）が大変良く，友との自然な関わり合いが効果的な表現を生み出すことにつながった。

Ⅴ　本年度の研究結果から明らかになったこと，次年度更に研究すべき課題

1　研究の視点①　「思い」（表現主題）を表現に結び付ける手立ての在り方

松川北小の事例は「造形遊び」であり，子どもたちが材料と関わる中で「思い」を広げていくことを想定していた。そしてそのことと共に，活動場所となる教室を魅力的な環境に整えたことにより，子どもたちはこれから取り組む活動に対し，ワクワクしながら「こんなことをやってみたい」「こんなことができそうだ」という思いを抱いて制作に臨むことができ，主体的に表現を追求する姿が随所に見られる授業となった。

松川中央小の事例では，言葉で書いた最初の「思い」を出発点とし，アイディアスケッチでそれを描いた上で，モダンテクニックなどの表現方法や参考作品などを活用しながら「思い」へ迫るように，段階を丁寧に踏んで授業が展開されていった。学習カードを使い「思い」を言語化すること自体が手立てとなるが，その手立て単体では具体的な表現の見通しを持たせることが難しい。またアイディアスケッチを描きすぎると，その再現のための制作活動に陥り「思い」が薄れてしまう。このような課題に対し，今までの経験や新たな表現の出会いを活用できるような環境づくりを行い，「思い」を薄れさせないような配慮がなされていた。

松川中では生徒に見通しを持たせるため，授業の冒頭部に教師が実際に制作した様子の動画を見せつつ，丁寧な示範を行った。示範は時に児童生徒を強力に方向づけてしまう場合があるが，自由度の高い題材であったため，動画での示範は制作の見通しを持たせ，意欲を向上させることにつながった。また，失敗してもやり直しが可能な題材を開発したことで，生徒達が不安なく表現に挑むことができ，それぞれが抱く「思い」の実現に向け，積極的に制作を進めることができたと考える。

2　研究の視点②　「思い」（表現主題）を広げる「対話の時間」の設定と環境づくり

松川北小の事例では，自由に言葉を発し，友と自然に関わりながら活動する児童の姿が随所で見られた。その言葉によって自分の取り組みが評価された児童は，よりその活動にのめり込み，友の良い取り組みを見た児童は，自然とその活動を真似たりアレンジしたりすることで，子どもたちは皆多様な表現を行うことができていた。友との会話が「対話の時間」として授業の中で設定されていたわけではないが，魅力的な活動場所の設定や，適切な距離感を保ちながら活動する授業形態等の工夫が，自然な対話を生み出すために大変有効であることが分かった。

松川中央小では，4人グループによる学習と，ペアによる学習を展開の中に取り入れていた。4人グループの学習では，参考作品の「思い」について意見交換をすることで「もしこれが自分の表現だったら…」と想像しながら自分の「思い」を見返す機会を設定していた。また，度々「思い」をアウトプットし，自己の「思い」を修正したり，更新したりしながら制作を進めていた。自己の作品が完成形に近づくにつれ，作品に寄せる「思い」もより明確なものになっていったと思われる。

松川中では，どの教科の授業でも行われている４人組での話し合い形式が，本題材でも生かされていた。その取り組みは日常化されており，友と対話をしながら学びを進めていくことが生徒達の中で自然な姿となっているため，作品制作の過程においても自然に友と相談したり，アドバイスしたりする姿が生まれていた。教師が対話の時間を一律に設定する際，話し合う「必要感」を前面に出すのは難しい場合もあるが，生徒自身が状況に応じて必要感をもって対話しつつ制作を進めていけるのであれば，それが一番自然なことだろう。また我々は，自分と作品との間で試行錯誤する際に生まれる「対話」を「自己内対話」と考えてきた。しかし，その具体的な場面がなかなか捉えられずにいたが，今回の授業に取り入れた「失敗を恐れず，様々に試すことのできる題材・素材の設定」と「試行錯誤する時間の確保」が，生徒たちの自己内対話を生んだと捉えることができた。本授業のような題材を更に開発していくことや，本時のような体験を各生徒に積ませることで，更に自ら追求し，学び続けようとする子どもの姿が向上すると考える。

3　次年度さらに研究すべき課題

(1)　一人ひとりが「思い」を持ち，その思いを具現化するために試行錯誤できる題材・素材の開発

・授業のねらいにそって，子どもたちに「思い」を抱かせる教科書題材導入場面の工夫
・材や場所・人との出会いで子どもの心を惹き付け，作品制作に見通しを持つことができる導入の設定
・失敗を恐れず試行錯誤できる題材や多様な表現方法の保障

(2)　授業のねらいと，児童生徒の「思い」に沿った評価

・制作途中においての評価の方法・教師の言葉がけのあり方・子どもの変容の見とどけ
・作品が完成した段階での「作者カード」(作者の思いを記したカード)を活用した鑑賞・評価のあり方
・実際の作品を持ち寄り，どう評価すべきか具体的に検討し，学び会う機会の設定